



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会

2007 / 8 / 30(木)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 3

当ブログの3号には当委員会の上島委員に佐賀インターハイの中から全国レベルのベンチTACTICSでなにか印象に残る事があったら書いていただくことにしていました。上島委員はそれよりもっと私たちの足元に指導者が考えなければならない事があるのではないかという視点から、依頼とは視点を変えた日ごろの上島委員自身のPHILOSOPHYを吐露してくださいました。指導者にとっては耳の痛いことの羅列ですが、これを実行する指導者が素晴らしい選手を育てるのだということは論を待ちません。じっくり拝読したいものです。

「一寸一言」

【指導者次第】

山の頂上を目指すときも、頂上は1つだけれど辿り着くまでいろいろな道があるのと同様に、人間どう生きるべきかと問うたとき、「人」それぞれ様々な生き方があるように、バスケットボールの指導方法もこれが一番だと云えることはできないのではないのでしょうか。

バスケットボールのチーム作りに於いても相手をパーフェクトに抑えることができ、相手より早く走って、シュート確立が90%以上と言う事は不可能なことです。まして人が考えて行動する訳で、そこには指導者はもちろん選手にも感情・感性がともない、このことが大きなファクターとなり、いろいろなケースが生じると同時にその時の選手の質によっても変化が伴います。バスケットボール競技の要素として「走る」・「飛ぶ」・「投げる」、「厳しい制限」のある中でのボールの扱い、「激しい身体接触」、「時間的制約」、さらにどの競技よりも「瞬間の判断」が要求され、「思考力と精神力」が大きな要因となりうるスポーツと考えた場合、チーム作りに於いても「チームはこうあるべきだ」と一言で、断定できるほど簡単ではありません。

私自身、自チームに携わって今年で38年、今もってチーム作りについては、その年によって選手の質を考慮したチーム作りを心がけております。従って、このように紙面で指導者の方に何かを伝えるということは、自分ごときがという思いですが、一寸一言の気持ちで日ごろ考えていることを言わせて頂きます。

チーム作りの一つの捉え方として「みこしの法則」と言う考え方も、バスケットボールが団体競技で組織を機能させるという観点から見るとチームの構成上の考え方が参考になると思われます。

「みこしの法則」とは……

みこしを担ぐ時に一生懸命担いでいるのは、せいぜい2割、担いでいるふりをしているのは6割、遊んでいるのは2割。このことは、組織を構成している殆どにあてはまると言われております。企業でも真剣に仕事に打ち込む人は2割、大過なく一日を過ごせばそれで満足する人が

6割、仲間の足を引っ張るお荷物となる人が2割。

今までチームの選手をみても、云われなくても自分で判断してできる人おおよそ2割程度、云わなければ出来ない人は半分以上、云われてもなかなか理解できず表現出来ない人は必ず存在し大方当てはまります。それでも、元気よくはつらつと取り組んでいればチームは十分に機能します。チーム事情は、異なっても大方のチームは、構成員それぞれに温度差があり、全員が同じ気持ちでことに立ち向かうということは、非常に難しいということです。人生も、バスケットボールも、余裕と遊びの世界がないと良い仕事もできないし、技術も覚えません。一番大切なことは、いかに楽しく一生懸命やるかではないでしょうか。

企業に於いても、社長の目指していることと、役員、従業員の考え方には大きな差異があると云われております。

その中でも成長を続けられる企業とは、例えば100匹の狼の群れと、1匹の狼に支配されている99匹の羊の群れが戦った場合、どちらの群れが勝利することが出来るかという、1匹の狼を頂点に統率のとれている99匹の弱い羊の群れの方が勝つと云われているように、トップである社長のリーダーシップが十分に発揮されており、なおかつ階層分化されている組織を維持している企業が長く栄えることができます。

ローマ帝国が紀元前から王制、共和制、帝政と組織が変遷しながらも1,000年も続いたのは、他国を模倣せず、ローマ独自の自由と秩序という体制を、その時々最高責任者が取り込んだことによると云われております。

つまり、第一にトップのリーダーシップ次第でその組織の方向性が大きく左右されます。バスケットボールのチーム作りも、指導者の考え方、行動がチームを決する場合の一番の要素となります。選手は万能でないということを理解していても、とかく指導者は自分の色に染めたり、多くのことを要求し同一視しがちになりますが、選手がそれぞれ違う顔を持っているように体格・身体的能力・思考能力・精神力、いずれをみても皆違う訳で、選手を育てる場合には、その選手他選手には持っていないどんな些細な特長でも指導者は見抜くべきで、それを焦らずじっくり育み、自信を持たせてやるのが大切ではないでしょうか。一つのことに自信を持つことができれば、達成できたプロセスは同じ事となるので、どうしたら成功出来るかの方策が理解できているので、他の事に対しても一生懸命打ち込むことが出来るようになると思います。選手を見きわめもせず何でも要求して無理強いさせてしまうと、選手の方で負担と感じて、やがてコートから去っていつてしまうことになるでしょう。

特に小学校、中学校、高校に於いては勝つチームにこだわり過ぎず、まずチームとして個人としての質の向上を図ることが第一で、ファンダメンタルをしっかり身に付けさせると同時に物事を最後までやり抜く精神力と、人との関り合いの大切さを教えることが重要と思われます。一方では、いずれどこかで、どんな花を咲かせるかも知れない大切な原石を人数が多すぎるとか、使えるゴールが少ない等の言い訳を先に並べて練習もさせず、応援だけさせている光景を目にする事がありますが、やがて光り輝く大きな素材を、どうしたら伸びるのか、良くなるのかを第一に考えることにより、自ずと答えが出てくるのではないのでしょうか。

人間の感覚的なものの発達成長は、だいたい12~13歳ぐらいまでだと云われております。しかも感覚的なものが身に付くのは遊びの中から得るのが一番と云われております。その大切な時期に練習もさせず、ただ見せておくことは大きな損出となります。

一般に一人の人間が他の人間を掌握することが出来るのは、せいぜい7人程度だと云われます。会社に於いても、一般的に課は7人程度が良く機能すると云われております。部員の人数が多いということはバスケットボールが好き人が多いということですから、むしろ大事にして練習内容等に工夫を凝らすべきで、そこが指導者として最も真価が問われ、一番の腕の見せ所でもあります。

指導者として、良い選手がいる時だけ一生懸命に体育館に足を運び、良い選手がいない

時は休眠状態を装うことは、慎むべきで「みこしの法則」と同様、チームに良い選手がいなくても、いなければいけないなりに、自分が必要と感じとることができれば、必ず選手は育つものです。さらに使うことによって選手の自覚を養う事ができ、責任感を醸成する事もできるのです。また多少やんちゃで、はみ出し者の選手の方が思いのほか伸びたりチームの要となったりと、けん引役となる場合もあります。

チーム事情が大変な時こそ、指導者にとって、どうしたらチームが良くなるのか考える最高の勉強の機会でもあります。そういう指導者の姿勢こそが選手がもっとも信頼を寄せ向上心を高める大きな原動力となり、組織が活性化される要因なのです。

指導者はどのような苦境の立場に置かれようとも、常にアイディアマンであり続けることは勿論、選手に日常の練習に好奇心を抱かせるような創意工夫を心掛けることが必要ではないでしょうか。指導者は個人の選手に対する能力の先読みや、試合の結果を先に読むのではなく、何事も最後まで諦めることなく、結果を恐れず、最後まで貫き通すことが肝要かと思えます。

そして、最も大切なことは、「人がやっていないこと」、「何か新しいことがないか」を考え、指導者自身のオリジナリティを確立することです。もともと最初から地上に道が通っていたのではなく、誰かが先頭に立ち、歩いて、それに皆が続いて道となった訳です。

アメリカのスペースシャトル事故から20周年の式典で、事故機「チャレンジャー」の船長フランシス・スコビー氏の妻ジューンさんは「最も危険なのは、危険を冒さないことだ。危険がない所には発見も、新たな知識もない」と夫を事故で亡くした人の、この言葉に感銘を受けました。まさにその通りだと思います。指導者の皆さん、失敗を恐れず勇気を持って大いに羽ばたいて下さい。

つい先日開催されたインターハイの3回戦で、相手ポイントゲッター(182cmの中国人で常に30点以上を得点)をプレッシャーディフェンスとヘルパーを決めることにより、うまく封じることができ、38対22と前半を戦16点リードで終わりました。

後半戦に入る前に相手は必ずプレスを仕掛けてくるからと準備をして、第3ピリオドを迎えましたが、出だしにイージーシュートミスをしてから、動揺ミスを連発してしまいました。タイムアウトを考えましたが、相手チームも決して良い状態ではないので、そのまま続けさせました。結果、第3ピリオド3得点しか取れず一気に逆転され、その後もペースを取り戻すことが出来ないまま、58対67のスコアで友達を無くすような大逆転負けをして帰って来ました。

相手のプレスに対するオフェンスアライメントは間違っていなかったが、センターフラッシュとスロアーを替えるべきだったこと、タイムアウトの時期、また選手を信頼しすぎたことを今になって反省しています。

プレスダウンは前もって対策を講じていたのと、ガード陣にはある程度信頼も寄せていたので、まさかこのような状況になるとは思いもよませんでした。今回もまた指導者の責任でこのような結果となりました。今もって、反省の日々の繰り返しです。またチャレンジします。

そして、北海道のバスケットボール発展のため、皆で知恵を出し合い、高めていきましょう。

北海道バスケットボール協会 強化普及委員会
指導者育成専門委員 上 島 正 光

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会